

甲 辭 根津嘉一郎

吾等の常に敬愛した佐竹次郎氏  
が卒然として世を去られました  
哀悼の情に堪えず、謹んで  
霊前に申し上げます。

顧みらば、私が始めて君と相知った  
のは幼少にして物心のついた時から  
でありまして、爾來四十数年  
骨肉にもまさる愛導を忝うして  
今日に至りました。

君は佐竹作太郎氏の次男として  
山梨縣に生まれましたが君の先考  
作太郎氏は私の先考嘉一郎  
とは竹馬の友であつた關係で  
君は幼少時代から、先考嘉

一部の膝下に在りて親しく薫  
陶を受けられたと承りて居ります  
長じては根津傘下の諸会社即ち  
日本土地證券、南朝鮮鉄道  
大社宮島鉄道等各会社の  
社長並に日本殖産興業の代表  
取締役等を歴任してこれら會社の  
経営に専念されました。

當時根津翁のある所必ず佐竹  
氏あること恰かも影の形に添うが  
如しと称されましたが而も君は  
まだその頃三十歳をおきり出な  
かつたことを思うと先考嘉一郎  
が如何に若い君を信頼し、君に  
期待したか、またいかに君の資質

か風に英邁で責任感が強く  
よくその知遇に應え得たかを知るに  
足るのであります。

昭和十五年私の父が他界して、始  
めてその羽翼下を離れた君はいざ  
一個獨立の財界人として十分に  
その驥足を伸ばされ、日産生命  
専務を経て同社長に栄進し、次い  
で富国生命社長、昭和電工社長  
の栄任に就き、實業家として  
巨大の足跡を遺されたことは衆知  
の事であります。

その他根津系の遺業の達成に  
は多忙の身を以て常に献身的の  
努力を傾けられ、学校法人根津

育英會の監事として武藏高等  
学校並びに武藏大学の育成に  
盡し、財団法人根津美術館の  
理事としてその経営に努め、又東  
武鉄道會社取締役として日會社  
の樞機に参画しその發展に参  
與されました。

思うに君は誠實の人であり情誼  
に厚く人の苦しみをか苦しみとし  
人の喜びをか喜びとする人であ  
りました。これが常に周囲の信賴と

敬愛とを受けた所以であり特に  
私の弱冠にして父を表い四十数  
年来兄の如く親しみ、公私共に  
隔意のない相談を申し上げて

御指導をいたごいて参りました。  
将来も永くこれを期待して居ります。  
したのに、今や忽焉として永別  
するに至りました。今より以往誰  
に後つて事を謀り誰と共に喜びを  
分ちましようか。誠に茫然たるを  
覚えるのであります。

しかし私はここに君の遺志を継ぎ  
事業の経営に力を致し先考の  
遺業を顕彰し以て君の恩顧  
に酬いたいと念じます。願わくば  
在天の霊、永く冥護を垂れ  
給わんことを。

茲に主として先考と私とが二代  
に亘つて蒙った恩誼の一端を

申し述べて感謝の誠を申し上げます。

永訣の辞と致します。

昭和三十四年十月二十六日

根津嘉一郎